若越郷土研究　四十四巻二号

稿して、応援して下された。

確かに「性之研究」第三巻（大正10年）には五編ほど三田村鳶魚の論稿を見ることができる。

監獄に代用した遊女町
（特別号「賣淫研究」大正10年8月）
江戸時代の性慾教育
（四号　大正10年9月）
遊女の避妊不妊
（特別号「賣淫研究」大正10年9月）
同性愛の異性化
（六号　大正10年10月）
同性愛の異性化（其の二）
（七号　大正10年11月）

広瀬千香の言う「いつも寄稿して」は少々誇張された表現だが、鳶魚が《北野》の雑誌「性之研究」を「応援して」いたことは事実のようだ。それより以前、「性之研究」（第一巻第五号　大正九年七月　一九七ページ）には「江戸研究者の手紙」と題して「三田村玄龍」（鳶魚の本名）より寄せられた手紙が

北野博美の大正時代（セクソロジスト）

――折口信夫への遥けき道程③

内海宏隆

6　三田村鳶魚への接近―「性之研究」休刊へ【大正十年】

広瀬千香の「山中笑翁片影」（『山中共古ノート』第二集）では《北野博美》と三田村鳶魚との出会いを次のように記している。

中村（古峡）氏、菅原（教造）氏との交際から、北野は三田村先生を知り、眼をかけて戴いた。大正八年夏、北野が雑誌「性之研究」を創刊した時、三田村先生は、いつも寄

紹介されている。鳶魚と《北野》との交流はどのようにしてはじまったのだろうか。それは『三田村鳶魚全集』第25・26巻所収の「日記」を読むことである程度明らかとなる。「性之研究」の文字が「鳶魚日記」に初めて登場するのは大正九年五月四日のことである。「〇謡曲界、性の研究、集古。」とある。その後六月八日の記事に「〇性之研究第四号届ク、何故ノ寄贈カ知レネド貰ツテオク、先日礼状ハ出シタリ。」とある。おそらくこの「礼状」が「性之研究」（第一巻第五号）に掲載された「江戸研究者の手紙」なのだろう。以下大正九年には七月七日、八月二四日、十一月七日、十二月六日と「性之研究」の文字を探すことができる。《北野》が雑誌の新号が出る度毎に鳶魚に寄贈していた様子がわかる。大正十年に入ると、一月二日「恋愛講座」（筆者註・北野が大正十年より刊行を始めた新雑誌）、三月二七日に「性之研究」の記録の後、五月四日「北野博美氏。」と記してあるのを見つけることができる。おそらくこの大正十年五月四日が《北野》と鳶魚とが初めて出会った日のようである。広瀬千香は「三田村先生」の《北野》に対する援助を「大正八年夏、北野が雑誌『性之研究』を創刊した時」としているが「鳶魚日記」で見る限り二人の関係が実際に始まったのはもう少し遅くなってから大正十年初夏ころのことと推定される。

大正十年の「鳶魚日記」にこのあと記された《北野》や雑誌「性之研究」に関する記事を列挙すると左記のようになる。

「五月十九日　〇監獄に代用せる遊女町、十六枚、累計九十三枚半。」「六月五日　性之研究」「六月十三日　〇江戸時代の性慾教育（上）、十一枚、計七十枚。」「七月一三日　北野博美氏を訪ひ、平林寺に入る。」「八月一八日　性之研究特別号届く。」「九月一〇日　性之研究。」「九月一三日　避妊不妊の遊女、十八枚。」「九月二一日　同性愛の異性化（一）、十三枚。」「十月四日　売淫研究」「十月一五日　同性愛の異性化（二）、十三枚。〇月に乗じて性之研究社にゆく。」

大正十年五月四日《北野》は鳶魚に「性之研究」の原稿依頼をしに行ったのではあるまいか。二週間後の十九日、のちに「性之研究」特別号である「賣淫研究」（大正10年8月）に掲載されることになる「監獄に代用せる遊女町」の原稿十六枚を執筆している。こうして鳶魚と《北野》との「執筆者／編集者」関係は始まったのである。十一月十三日には「性之研究茶話会に往く」という記載もあり、ここに至り二人の関係は更に一歩深まったものになっていったようである。

◆

「性之研究」は創刊号から好調な売れ行きを見せ、《北野》はこれに続いて雑誌「戀愛講座」を大正九年十一月に創刊した。（「戀愛講座」は大正十年三月に第四号を発行した後『性之研究』に吸収合併された。「性之研究」第三巻第一号（大正十年五月）の裏表紙に「戀愛講座」第六輯「情死研究」の宣伝が掲載されているが、東大明治新聞雑誌文庫が所蔵しているのは第四号まで。筆者は以後の号未見。）また「性之研究」特別号として雑誌「賣淫研究」を大正十年八月に創刊した。「性之研究」第三巻第一号（大正十年四月）には「賣淫研究」創刊号の予告が一面を使って掲載されている。「北野博美氏十年間の研

究漸く成る」というコピーのあとに《北野》自身の言葉として「私は此の問題の研究に從事するやうになつて早や足掛け十三ケ年の時日を經過した。」という言葉が載せられている。（逆算してみると明治42年以来（16歳のころより）《北野》はこの問題と取り組んできたことになる。《北野》の「性研究」は福井商業学校を中退し新聞記者になったころに始まることとなる。あるいは《北野》は新聞記者として性風俗関係の事柄を専ら取材していたのだろうか。川村邦光は「セクシュアリティの近代」（講談社新書メチエ　96）の中で明治40年代という時代を、明治34年高山樗牛が『美的生活を論ず』で性慾を『人性本然の要求』と肯定的に捉えたことを契機として「産婦人科医、性科学者（性欲学者）といった専門家が一般向けのセクソロジーの本を出していく」時代と規定する。前述した明治末年の「ロシア文学ブーム」と並行してあるいは北野の志向をこうした時代的な流れのうえで捉えかえすこともまた可能であろう。）「戀愛講座」第四輯として発行された「宗教的戀愛の研究」は「多大なる好評の下に忽ち賣切れとなり、爾來久しく書店に其影を失つた」が「其後の注文に對しては不止得御斷りをしていた次第であつたが、あまりのことに」『性と宗教』と改題して重版されたことが「性之研究」（第三巻第四号　大正十年九月号）に掲載されている。大正八年夏に産声をあげた「性之研究會」並びに雑誌「性之研究」はその後、「戀愛講座」「賣淫研究」などの兄弟誌を増やしながら順調な成長を遂げているようであった。

「◇性の問題が大流行してゐる」とは「郷土趣味」（大正十年三月号）の「編集餘話」の中の言葉であるが、確かにこの時期「性之研究」自己増殖運動（「戀愛講座」「賣淫研究」などの新雑誌創刊）の他に澤田順次郎主宰の「性」（一九二〇）羽太鋭治主筆の「性慾と人生」（一九二〇）日本性学会刊行「戀愛」（一九二一）田中香涯主宰の「變態性慾」（一九二二）などこの種の雑誌の増加は、大正十年代初期の一現象として捉えることができる。時代の流行の波に《北野》はまさに乗ったのであった。更に「郷土趣味」の「編集餘錄」を追ってみる。「世の中は追々に變化して來て一時勞働問題で騒いでゐて出來る本も多くこの方面計りであつたが近時大分それも厭が來て性慾問題が盛んになつて來た。澤田順次郎の「性」北野博美氏の「性の研究」は共に月刊雑誌として益々發行部數を加へられ他に多くの著書も出版されて來た。眞面目に性の研究をさるゝ人が多くなつて來たのが何より喜こばしい。」（大正九年六月）「北野博美氏主筆の「性之研究」は第二の三迄發行された、そうして愈々眞面目に眞劍に性の研究を發表されてゐる。ヨタな記事がない丈堅すぎる恐れはあるが見てゐて其熱心に感心をする。（中略）尚ほ十一月から「戀愛講座」も發行された、こう云つたものは軽薄になり安いものである。が内容も中々充實してゐる。吾々は性とか戀愛とかを眞面目に研究さるゝ方にこの兩誌を推薦する。（緣紅）」（大正九年一二月裏表紙）しかし、その隆盛も極めてつかの間のことに過ぎなかった。

東大明治新聞雑誌文庫に収められている雑誌「性之研究」は大正八年一二月一五日発行の創刊号から大正十年一一月二〇日発行の第

三巻第七号までである。第三巻第七号は別に終刊号と題されているわけでもない。が、実はある事情をもってどうやら「性之研究」はここで終刊を迎えることを余儀なくされたようなのだ。（前出・斎藤昌三著「36人の好色家」中の「雑誌『性之研究』が（中略）休刊したのは大正十年頃か。」という記述を一つの裏付けとしたい。）「ある事情」については「性之研究」第三巻第四号（大正十年九月号）の「本誌の發賣禁止に就いて」に詳しいのでここから引用したい。

其の一

本誌第三巻第二號は、其發行後數日にして突然其筋より發賣を禁止する旨命ぜられた如何なる理由に據るかは詳しき説明なき為め判斷に苦しむ點なきに非らざるも、一檢閲官の言辭より推察すればその掲載記事中風俗を壞亂すべしと認められたるものある如く主としてヴエツキの「生理學より觀たる性的行為」注意の的となりたる如し。吾等は如何なる點より考察するも此の一文が現代の善良なる風俗を壞亂する虞れありとは認められざるも當局には當局の觀る所ありてのことなれば今更多くを言ふの必要なかるべしと信ず。唯だ吾等は吾等の信ずる處に從ひ、飽くまでも人類生活の向上と幸福とを希ふ衷心より致せるものなる以上當局とは不幸其見解を異にする點ありたりとする□毫も恥ずべき行為とは考へざるも、若し果して此一文が眞に今日の善良なる風俗を壞亂すべき性質のものなりしならば吾等茲に深く其の不明を謝して以後は更に一層の愼重なる態度を以て斯學の為め、人類のために盡粹せんと希ふのみ。會員並に讀者諸氏のため更めて茲に吾等が信念と態度とを明かにして置く。

其の二

本誌第三巻第二號は其の發行後數日にして突然發賣禁止の命をうけたが、其後八月十九日東京地方裁判所鈴木檢事は編輯人北野千香を召喚して本誌並びに本會の性質に就いて種々訊問する處があつた。其後の經過に就いては何れ次號に詳細する豫定であるが、這回問題となつたのはヴエツキの「生理學より觀たる性的行為」及びつゆ香の「處女とキツス」の二篇であつた。而も不幸にして此二篇は何れも編輯人千香の執筆せるものゝみであつた為めに、總べての責任が同人一人で負はねばならぬことになつた。其後本件は東京區裁判所に移されたる如く、二十四日更に東京區裁判所下田檢事よりの召喚あり、罰金の金高及び略式裁判を以てしては如何との相談があつた。吾等編輯部としての考へもあれば、目下其の方法に就いて考究中であるが、何れ次號に於て詳しい報告がしたひと思ふ。

其の三

本誌が發賣禁止となつた—と聞いた時私は一寸驚いた。然し此の驚きはやがて或る喜びに變つて行つた。それは最近性慾研究といふことが我國の流行になつて—勿論それが真摯な研究であるなら吾等の喜ぶ所であるが、何れも刺戟的文字を並べて青年の好奇心を唆らうとする、賣らん哉主義のもので—この事に就いては既に度々述べて置いたが—あるから、それでは名を研究にかつて却つて其本質を毒するものだと私かに憂苦してゐたのであるから、本號の發賣禁止が彼等にとつての一大警告となりはしないかと考へたからである。本誌の態度、吾等の信念が如何に真摯で忠實で

あるかといふことは今更私自身の口から言はずとも讀者の總べてが既に充分に承知しておられる筈であるが、此の名譽ある本誌に多少の疵をつけた罪は吾等の深く謝する處である。

其の一～三までにわたって書かれた記事の内容は「性之研究」（第三巻第二号）「発禁事件」の経過説明と自己弁護の主に二種類に分かれると思う。発禁処分の対象となったのはヴエツキの「生理學より觀たる性的行為」とつゆ香（北野千加の筆名）の「處女とキツス」の二編であるが、前者は性交に関する医学的論文であり、後者は筆者のファーストキスにまつわるたわいもないエッセイに過ぎない。今日的観点から見れば勿論のこと、当時のモラリティーの水準からしても「風俗壞亂する虞れ」など到底あるものとは思えない。「一寸驚いた」のは《北野》ばかりではあるまい。当局が問題にしたかったのはその内容云々よりも寧ろこれらを執筆（一編は翻訳）した人物その人にあったようだ。「何れも編輯人千香の執筆せるもの」そこに問題点があったようである。「變態心理」との兼合か実質上の出資者だからか「性之研究」の發行兼編輯人は創刊時よりずっと《北野博美》自身ではなく妻の北野千加になっていた。当局はそこへ目をつけて「總べての責任」を「同人一人で負はねばならぬことに」したのではあるまいか。女性がおおっぴらに自身の性体験を赤裸々に綴ったり、性研究に携わったりするという行為そのものが当局を刺激したのではあるまいか。「最近」の「性慾研究といふ」「我國の流行」に歯止めをかけるための「見せしめ」として彼女がターゲットにされたのではあるまいか。（「鳶魚日記」大正十二年八月十八日の欄に貼付してある「前月の新聞紙」の記事の切抜。「性研究／少女新耽性研究、質疑教室窘其師、昂然種馬場中去、喜見雌雄交尾姿」「性研究」の流行は千香を「見せしめ」にしたくらいでは止まなかったようである。）

言葉のうえではめげていないように見えるが実際のところ《北野》のショックは大きかったようで「會事務並に雜誌編輯事務は、一切編輯部同人諸氏に委任」して大正十年八月より「強度の神経衰弱」のため群馬県新田郡薮塚に転居していることが『性之研究』（特別号「賣淫研究」大正十年九月）の後付けから伺える。「性之研究」（大正十年十月号）「編輯室にて」では研究会事務主任の杉原賢二が「つゆ香がこれから大いにやる。（中略）自分達も讀者諸君と共に、大なる期待を持つてゐる。」と記しているが、実際のところはこのあとまもなく「性之研究」は休刊となったようだ。なお第三巻第七号の「編輯室より」には「本誌六月號も遂に罰金二百圓といふことで解決がつきます。」と一言だけ報告がある。

「郷土趣味」（大正十一年五月号）の「編輯餘錄」には「性の雜誌も大變な勢で發展し性的神の記事も再三記されてゐますがさて喜しいものも少いし又一寸聲をひそめた様に思ひます」とある。「一寸聲をひそめた様に思」うというのは「性之研究」大正十年六月号の発禁処分を念頭においての言葉だと思われる。

北野晃氏は後年、官憲ＯＢより「（事件が）なにもないときや手柄を立てたい時はあ

そこ（北野博美宅・性之研究会）へ行けばよい。必ずなにかあるから」ということが当局担当官の間で密かに囁かれていたということを聞いたそうである。当局担当官にすれば北野の活動の学問的意義など与かり知らぬことだったのだ。数回に及ぶ「手入れ」（註12）や「風俗壊乱罪」の適応により、《北野》はすっかり性の研究に対する情熱を失ってしまったという。

7　鳶魚を手伝う日々【大正十一年】

《北野博美》が妻・千加を伴ってこの年の四月十九日、南方熊楠を訪なっている様子は「上京日記」（『南方熊楠全集』第十巻五十一ページ）に明らかだ。

（筆者注　午前中に四谷南伊賀町の大久保利武を訪ねた後）宿に帰りて昼寝熟睡中へ下女来たり、北野博美氏訪わると告ぐ。よって起きて面談す。この人、齢三十歳、至って篤実温厚の人なり。前年より『性之研究』を発行し、ずいぶんよく売れるが、生来病身にて一月来休刊、しかるに某呉服店の主管同情して出資し、来月よりまた刊行を続けるよし。その妻千加女二十六歳との間に子二人あり、千加女は才姿兼備の人、去年接吻のことを妙筆で書きしより二百円の罰金に処せられ、すでに入監せんとせしも、博美氏田舎の持宅を売って償いしと聞く。いずこにも化物と金とはなきものと浩歎これを久しうす。

熊楠の叙述より可能な考察をいくつか行ってみよう。まず北野夫妻の年齢についてだが、それぞれ「三十歳」「二十六歳」というのは満年齢でなく、数え歳によるもの。「前年より『性之研究』を発行」とあるが、実際の創刊は大正八年十二月のことだったから三年前が正確なところである。「ずいぶんよく売れる」というのは他の様々な文献で既に見てきた通り。「病身にて…休刊」というのは『性之研究』誌上に見た「強度の神経衰弱」という記載や斎藤昌三の「少雨荘交遊録」にあった「…文筆活動に転向したが、いさゝか無理もあったか神経衰弱を起し云々」といった記述に一致する。「去年接吻のことを妙筆で書きしより二百円の罰金に処せられ」というのは既に見てきたとおり『性之研究』（第三巻六号　大正十年六月号）掲載の「処女とキッス」ならびにヴエツキ「生理學より觀たる性的行為」に対する「風俗壊乱罪」の適用、罰金刑処分という経緯と一致する。「博美氏田舎の持宅を売って償いし」というのは後に斎藤昌三の文章に見るように「細君の里から買つて貰つた目白の家」の売却を意味している。（北野晃氏証言）

熊楠の叙述が確かなものであれば『性之研究』は前年十二月まで刊行が続いていたことになる。東大明治新聞雑誌文庫に所蔵されている『性之研究』は大正十年十月号までだったので尚二カ月分の刊行が続いていたのだろうか。そして「来月よりまた刊行を続けるよし」とあることから大正十一年五月から「性之研究」は再開されたのだろうか。『性之研究』再開について北野に同情・出資した「某呉服店の主管」とはだれのことだろう。「某呉服店」とは『戀愛講座』などの裏表紙にしばしば宣伝をうっている「白木屋呉服店」のことだろうか。「熊楠日記」の発見によりまた新たな謎が生まれた。『南方熊楠全集』

（別巻2　二七九ページ　平凡社　75）の「年譜」より《北野》は六月九日にも熊楠を訪れていることが知られる。しかし詳細については不明。（「熊楠日記」が全面公開されれば熊楠と北野との交流関係ももう少し明らかになるのだろうが、現在刊行されている平凡社の全集からわかるのはここまで。）

「三田村鳶魚日記」大正十一年四月二八日の項には「〇夜、土屋直三郎、杉原光成氏等、性之研究救済のことにつき来話」とある。また六月四日には「〇夜北野博美氏。」とある。これらの記載から大正十一年に入ってからも「性之研究」再開に向けての動きはある程度あったことが伺えるがそれもついには実現しなかったようである。

斎藤昌三は前出『36人の好色家』の中で誠に手厳しい《性之研究始末記》めいた内容の発言をしている。

『性之研究』にしても彼の力には少し重荷過ぎていた。従つて内容が、性の問題から兎角民俗の方に流れがちであり、彼の力はそれらを研究するには余り貧弱であるとこに、彼の非常な悩みと煩悶のあつたことが察せられるし、それを家人に強いてかくそうとした結果が、彼を神経衰弱に陥れたのだ。／それ故折角妻君の里から買つて貰つた目白の家も、売つては買い戻されること再三だつたらしく、妻君持参のものも再三再四、七ツ屋へ往返したらしかつたのは、彼の無能力と人知れぬ虚栄があつたのだ。

「妻君の里から買つて貰つた目白の家も、売つては買い戻されること再三だつたらしい」「妻君持参のものも再三再四、七ツ屋へ往返したらしい」（これらはおそらく斎藤昌三が広瀬千香から直接聞いたことだろうが）これらの言葉から類推できるのは、一見順調なように見えた「性之研究會」の出版事業も裏を返せば火の車の台所事情だったということだ。（広瀬千香は「数年来、経営してゐた月刊誌が不振で、潰れかかつてゐた。おまけに、私の家庭も、末期症状で、解体に瀕してゐた時であつた。結婚十年目、もうニッチもサッチもいかない、ギリギリの所に来て、遂に大正の末年、一切崩壊、目白の家を棄てて、大森へ引移つた。」と当時の様子を語る。「青燈社の出版」『思ひ出雑多帖』）

しかし仮に斎藤の言う通りだとしたら（自身の力が「それらを研究するには余りに貧弱である」として「非常な悩みと煩悶」を《北野》が抱いていたとしたら）それは後年彼が折口信夫に接近していく非常に強い動機となったはずである。また「内容が、性の問題から兎角民俗の方に流れがち」になったというのは《北野》の興味／研究対象が「性之研究會」設立のころのような摑みどころのない・漠然としたものではなく、民俗学の方向に焦点があってきたということに他ならない。「無能力と人知れぬ虚栄」という指摘は前夫《北野博美》に対する広瀬千香の批判を斎藤昌三が代弁（かたがわり）したものか。しかし学問的な能力はさておいて生活能力ということに関しては《北野》は「無能力」と言われても仕方がなかったのかもしれない。「高崎年譜」の「家は…足の踏み場もなかった」「猫の食べ物はやかましいくせに、奥さんには二日に一杯のうどんをあてがって、徹宵梯子で渡り歩いた」などという記述を思い浮か

べると彼に家族をも顧みようとしない無頼性が存したということがいえると思うのだ。後々その無頼性が二度にわたる家庭崩壊を招く因となったし、家庭的の不幸と孤独な死へと自らを追い詰めて行く端となったことは否めないだろう。

さて再び「鳶魚日記」より《北野》の動向を探ってみたい。大正十一年八月一七日の項は「性之研究」以降の《北野》の様子を如実に語ってくれるものなのでここに引用する。

○北野博美氏来リ、神田崇文堂ニテ鐘が鳴るノ出版ニ付キ条件ヲ問フ、先方次第ト答フ、併セテ実業之世界社創刊ノ婦人雑誌ヘ寄稿ヲ求ム、月内二十四五枚ノモノヲ要ス、忙シケレドモ承認ス、同氏ニハ性之研究敗亡ニヨリ同情スベキフシモアレバナリ。

《北野》は「性之研究」休刊ののち、「神田崇文堂」や「実業之世界社」などの編集業務の下請けをしていたようである。自らの立脚点を失い（とりあえず生計を立てるためであろうが）フリーエディターとして再出発をしている。実業之世界は大正初期《北野》が関係した出版社であり、おそらく当時から知る編集者の安成二郎が彼に仕事を回してくれたのだろう。鳶魚も多忙なスケジュールを調整して《北野》のもってきた話に乗ってやろうとしている。「同氏ニハ性之研究敗亡ニヨリ同情スベキフシモアレバナリ」広瀬千香の「共古ノート」の中に鳶魚が「性之研究」に対して多大な支援をしたことが書かれていたが、鳶魚の支援は「性之研究」以降も絶えることがなかったことがこの文章よりわかる。その後も《北野》は鳶魚と崇文堂とのなかをとりもって出版の話を進めている。

「八月二十日　○北野氏より崇文堂の方略〃決定の報もあり。」「八月三十一日　北野氏へ今日までに寄稿の約を履む能はざるよしを通じてあやまる。何分余分の執筆は心掛けながらも暇を得ざるなり。」「九月一日　北野氏ヨリ明朝崇文堂同伴来訪ノ報有。」「九月二日　北野氏は崇文堂主人斎藤熊三郎を同伴して来る、相談の上江戸回顧上野と浅草といふ書名に定め、四五日中原稿を渡すことに約束す。」

「八月三十一日」の項などは端から見ていても鳶魚が気の毒に思えてくる。もともと《北野》に「同情スベキフシモアレバ」「忙シケレドモ承認」した仕事である。予定外の仕事なので「何分余分の執筆は心掛けながらも暇を得ざる」といった状態なのだ。《北野》の顔は立ててやりたい、しかし忙しい。鳶魚はある種土壇場にたたされていた。

「九月七日　○上野と浅草を整理し、緒言を草し、崇文堂へ明日午後来訪を求む。」「九月八日　○夜崇文堂を招き原稿を渡し、書名を江戸の思出上野と浅草と定む。」「九月二十日　○出社、崇文堂を呼び寄せ、写真を渡す。」「九月二十八日　崇文堂来り、校正は一日よりといふ、写真版大体出来せしとて持参。」「十月四日　崇文堂は来春売りに一冊で大要を握み得るやうな近松集を編纂してくれろといふ、此事は先日愚案を話せしためなり、手都合すべしと答へおく。」「十月二十八日　崇文堂の校正は百九十頁までといふ進捗甚だ鈍し、此の校正は相談の上引続き

二葉氏へ頼むこととせり。」「十一月三日　樋口二葉氏。」「十一月六日　上野と浅草の細目を作り、崇文堂へ送る。」「十一月二十三日　○今日午前崇文堂新刊見本一冊持参、出版届の捺印を求む。」「十一月二十四日　○北野、樋口両氏へ金十円宛謝礼。」

九月二日以降《北野》の名前はしばらく「日記」から姿を消すのだが「崇文堂プロジェクト」の方は徐々に進行し始めることになった。「崇文堂」「二葉氏」などが《北野》に代わって登場するので《北野》の役割は書店と著者とを引き合わせることまでにあったのかもしれない。「高崎年譜」によればこの「大正十一年九月、国学院大学に折口信夫の万葉集講座開講され、翌年一〇月、源氏物語全講会開催されるや、常に夫人同伴聴講。折口学に傾倒し、終生違わず。」ということになる。九月二日以降《北野》の名前がしばらくの間「鳶魚日記」から姿を消すのは《北野》が折口への接近を始めていたからかもしれない。（「万葉集講座」とはこの年九月より白鳥社主催で開講された「万葉集三十回講座」のことである。詳細はつかめないが、おそらく翌々年一月に開講された「源氏全講会」と同じく公開講座としての性格が色濃いものであったと思われる。）「高崎年譜」における「夫人同伴」の「夫人」とは「千香」のことを指している。

大正十一年折口信夫三十五歳、前年九月に国学院大学教授となる。《北野博美》二十九歳、広瀬千香二十五歳、西角井正慶二十二歳、「年譜」の著者高崎正秀はこの年まだ十九歳であった。

註

12　全国各地より苦心して集めた性神像を官憲がリアカーに載せて没収していってしまったという話は「高崎年譜」や新井恒易氏の筆者宛書簡の中でも触れられている。「性神信仰の分布状況を調べ、男神、女神の造形物を集めていたが、警視庁が荷車を持ってきて、みな没収され、力が抜けたとよく語っていた。」（新井氏書簡）